



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	組織文化としての体育の指導観形成に関する研究：小学校という組織に着目して(論文要旨)
Author(s)	成家,篤史
Citation	
Issue Date	2018-09-25
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2309/150389">http://hdl.handle.net/2309/150389</a>
Publisher	
Rights	

氏 名 : 成家 篤史  
専攻分野の名称 : 博士 (教育学)  
学位記番号 : 博甲第 313 号  
学位授与年月日 : 平成 30 年 9 月 25 日  
学位授与の要件 : 学位規則第 4 条第 1 項該当 課程博士  
学位論文名 : 組織文化としての体育の指導観形成に関する研究  
—小学校という組織に着目して—  
論文審査委員 : (主査) 准教授 鈴木 直樹  
(副査) 教授 中下 富子 教授 有元 典文  
准教授 清水 由紀 教授 物部 博文

## 学位論文要旨

本論文は、「体育の指導観形成において暗黙裡に影響を及ぼしている存在はどのようなもので、その存在はどのように形成されていくのか」について明らかにすることを目的とした。

まず、体育の政策的・学術的なレベルで語られている理念と教師の指導観との間のズレを理解するために日本の体育の学習指導論の変遷を検討した。検討の結果、日本の体育の学習指導論は、学習内容を学習者の気づきやめあて、話し合いといったものから生み出していくことを重視し、学習者の思いや創意工夫を授業の中で生かすという視点を、1948 年以降、ほぼ一貫して主張されていったことが明らかにされた。これは、日本の体育の学習指導論は学習指導要領が改訂され続けていても実践レベルでは授業づくりの方向性を変えなかったことを意味していた。すなわち、制度が変わっても授業づくりの根本を変更しないという教師の指導観が存在していると考えられた(第 2 章)。

このような外部の変化に対し、防護壁のような役割を果たし、教師の主体的・自律的な活動を保証するための役割を担っている存在を、紅林ら(2007)は学校文化や教師文化として捉えている。そのため、第 3 章では、学校文化や教師文化という存在が影響を及ぼしている小学校教師という組織に着目し、組織内の教師間のどのような関係性のもと、体育の指導観が形成されていくかについて検討することとした。検討の結果、教師の指導観形成について、小学校教師は組織内で、体育に関する事柄を共有する過程に、働きかけている教師と働きかけられている教師の両者ともに指導観を引き寄せたり、引き寄せられたり、引き寄せられなかったりすることで、既存の指導観が強化されたり、変化したりする影響が起きていることが明らかにされた。これらの関わりは、組織内の教師間の体育に関する事柄の共有を促す働きとその共有を抑制する働きの両方が存在する関係性の中、生み出されていることが明らかにされた(第 3 章)。

第 3 章で明らかにされた組織内の教師間の体育に関する事柄の共有を促す働きとその共有を抑制する働きが生み出されている背景を理解するため、日本の小学校教師という組織(職業集団)の文化という視点から検討した。検討の結果、小学校教師という組織には、組織内で同じ考え方を共有することを希求する文化が見出された。この文化は他の教師に自分と同じような考え方を求めたり、他の教師と自分が同じような考え方になろうとしたりする行為であるため本論文では同質性とした。一方、組織内で、他の教師に対して関係を閉ざし、異質な考え方を受け入れなか

ったり、自分の考え方を伝えなかつたりするという小学校教師という組織の文化も見出された。このような、他の教師との関係を閉ざし、異質な考え方を受け入れようとしなかつたり、自らの意見を伝えなかつたりする文化を本論文では閉鎖性とした。以上のことから、組織内で体育に関する事柄の共有を促す働きとその共有を抑制する働きが生み出されている教師間の関係性の背景として、同質性と閉鎖性という小学校教師の組織に存在する文化が見出された(第4章)。

そして、第5章では、同質性と閉鎖性という小学校教師という組織の文化のもと、どのように体育の指導観である組織文化が形成されていくのかということを検討した。検討の結果、同質性と閉鎖性という文化のもと、組織内の組織文化は、教師間の「賛同的なふるまい」「共有を促す」「お伺いを立てる」といった関わりによって再形成されていることが明らかにされた(第5章)。組織文化の再形成プロセスの中では、評価規準の機能を担っている「お伺いを立てる」対象のリーダーが入れ替わることが見出された。外部の人間の影響から、組織文化の対立に陥り、外部の人間との間にある閉鎖性の壁が崩れ、外部の人間を含めた形の新たな閉鎖性の壁を築くことが見出された。組織内の教師たちは、新たな閉鎖性の壁の中で同質性に基づく関わりを起し、組織文化を再形成していった。組織文化の再形成プロセスにおいて、重要だったことは外部の人間による「共有を促す」だった。これにより、これまでの見方や考え方に揺らぎが生じ、組織文化の対立まで発展した。その後、外部の人間を組織の評価規準であるリーダーとみなし、「お伺いを立てる」ことを通して、リーダーの考え方を理解し、組織の教師間で「賛同的なふるまい」を行うことでリーダーの考え方を共有していくという組織文化の再形成プロセスが明らかとなった(第5章)。

以上、述べてきたように、小学校教師の体育の指導観は、組織内で体育に関する事柄の共有を促す働きとその共有を抑制する働きの両方が存在する関係性の中、形成されていた。そして、この関係性の背景となっているのが、同質性と閉鎖性という小学校教師という組織に存在する文化であった。小学校教師という組織には、この同質性と閉鎖性によって形成されている組織文化が存在していた。教師の指導観は組織の影響を強く受けているため、組織文化と密接に関連している。そのように考えると、体育の指導観形成に暗黙裡に影響を及ぼしている存在は、同質性と閉鎖性に基づく組織文化である。この組織文化は、教師間の「賛同的なふるまい」「共有を促す」「お伺いを立てる」といった関わりによって形成されていくということが明らかにされた。